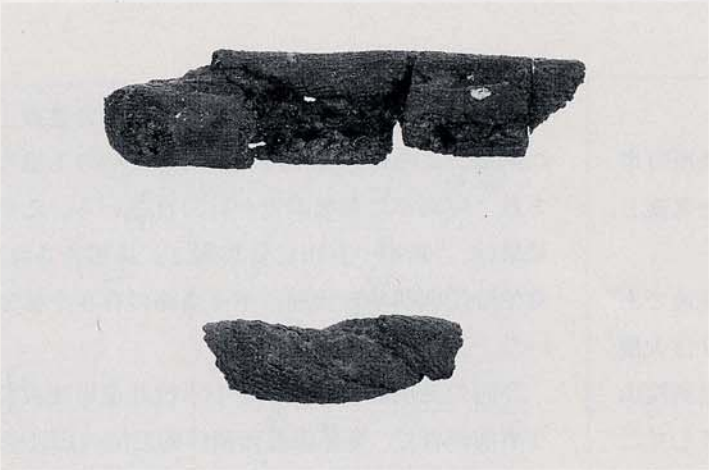
一宮市博物館　1992.10

博物館だより

No.14

企画展「織りの流れを探る ——機台の発達まで」

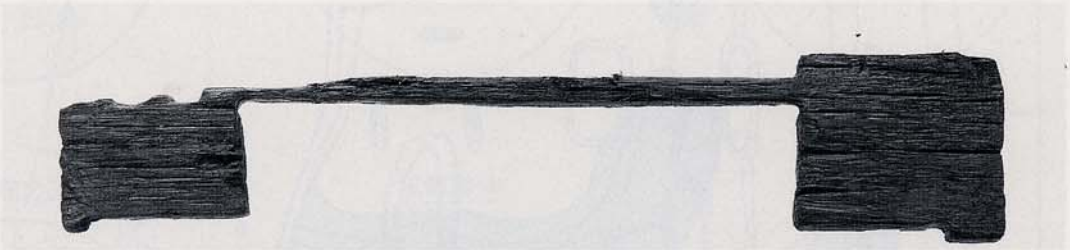
平成４年10月10日(土)～11月８日(日)



石川県金沢市米泉遺跡出土編布
(石川県埋蔵文化財センター蔵)

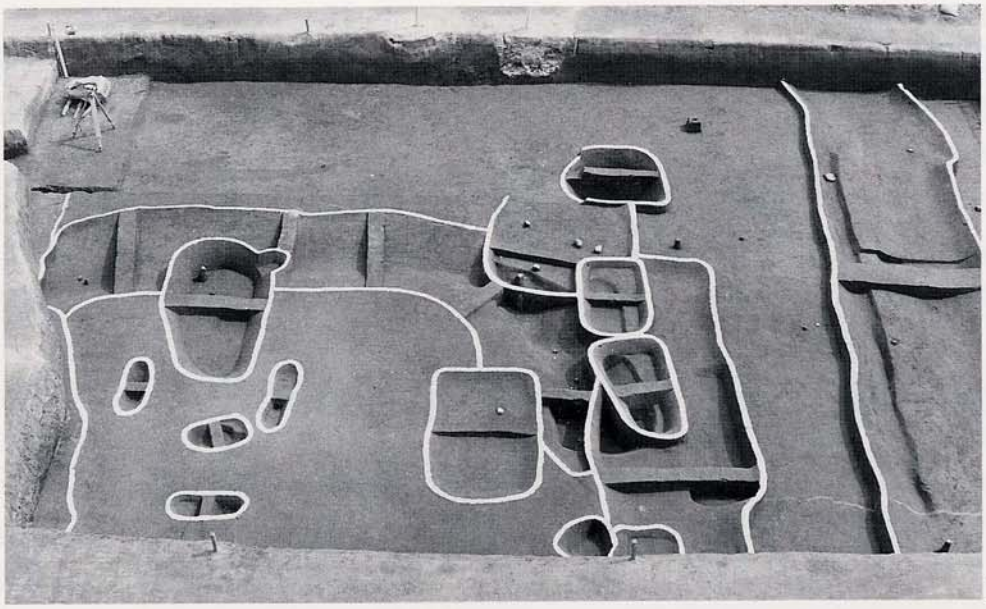
上　奈良県磯城郡田原本町
唐古・鍵遺跡出土布巻具
(田原本町教育委員会蔵)

下　滋賀県神崎郡能登川町
斗西遺跡出土千切
(能登川町教育委員会蔵)
※写真は各所蔵者提供による。



展示室から

私たちが着ている着物や洋服は、長い歴史のなかで変化し発達してきたものです。縄文時代、編む技術を使い布を作っていた人々は、新しい織りの技術を取り入れて弥生時代、現在原始機と呼ばれている機で織りはじめたのです。古墳時代には、地機・高機といった機台をもつ機が伝播し、織りの技術はより高度になっていきました。今回の企画展では、遺跡から出土した資料から古墳時代にいたる紡織具の変化を探るとともに、民俗資料との比較によって道具の機能を考察しようとするものです。



PL1　全景

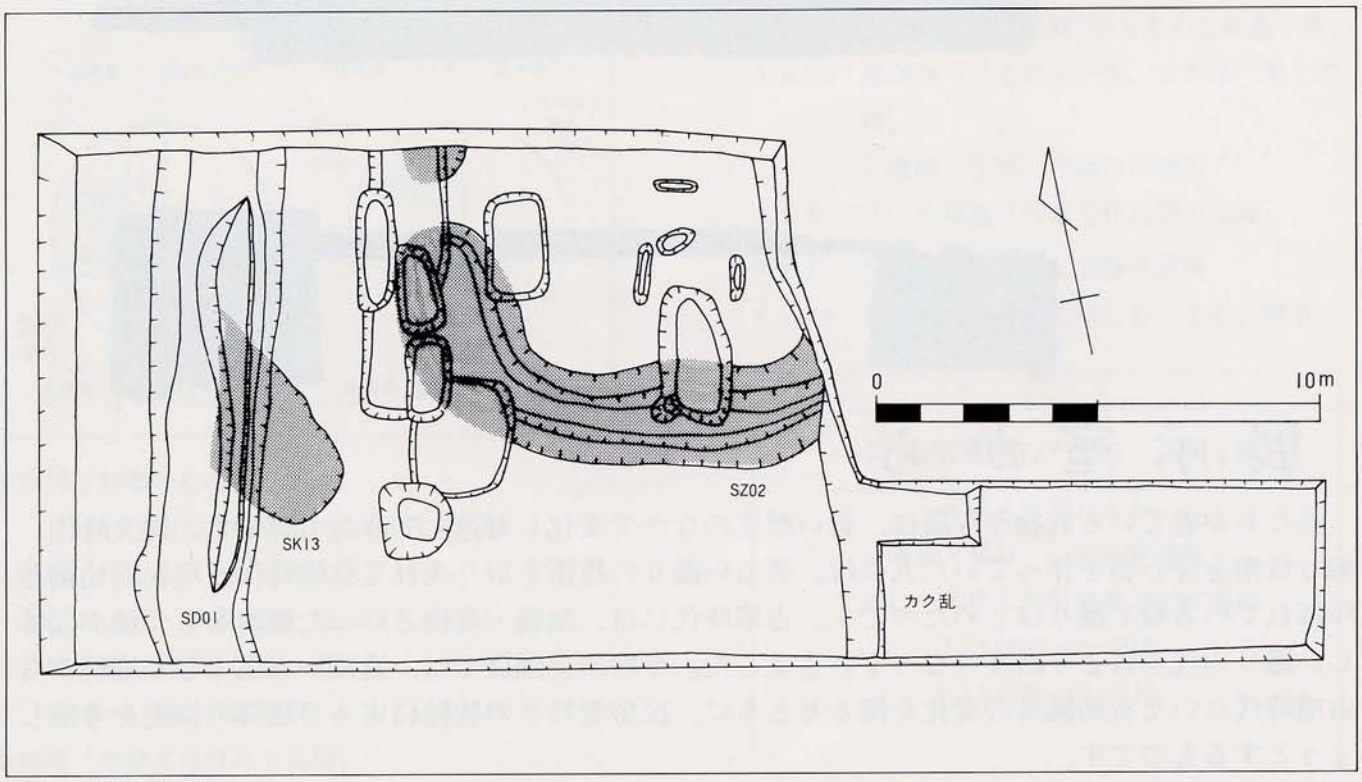
発掘調査ニュース

平成４年４月23日から６月20日まで、市内萩原町串作に所在する萩原中学校河田遺跡の発掘調査を実施した。以下、その概要を簡単に報告する。

萩原中学校河田遺跡は、標高５ｍ前後の微高地である自然堤防上に位置する。萩原町のこのあたりは大規模な自然堤防が非常によく発達し、北から尾張病院山中遺跡、雀戸遺跡、一宮西高校二夕子遺跡、そしてこの河田遺跡と弥生時代の遺跡が連綿と連なり、萩原遺跡群とも称されている。今回発掘調査を実施した地点は、こうした萩原遺跡群のある自然堤防上では南端にあたるものと考えられる。

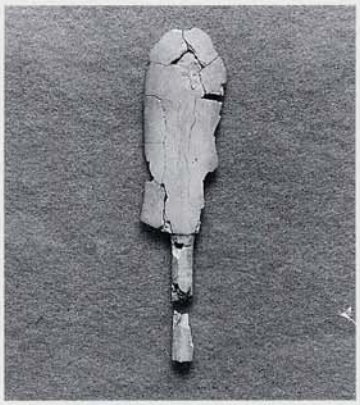
この河田遺跡の発見は、昭和35年校舎建設工事の際に遡る。この時、弥生時代前期と中期の土器片が採集され、翌36年に発掘調査が行われている。この調査の結果は、『新編一宮市史資料編２』に報告されており、弥生時代前期から後期に至る遺跡の存在が推定されていた。

今回の発掘調査は、萩原中学校武道場建設にともなう事前調査で、発掘調査面積は約320㎡(PL1･2)。当遺跡の基本層位は上層より表土、暗褐色シルト層、褐色シルト層、黄褐色砂層の順であり標高4.5m前後の褐色シルト層上面で、中世と弥生時代後期の遺構面を検出した。また標高４ｍ前後の黄褐色砂層上面で弥生時代



PL2　遺構平面図

PL3　遺物出土状況



PL4　銅鏃

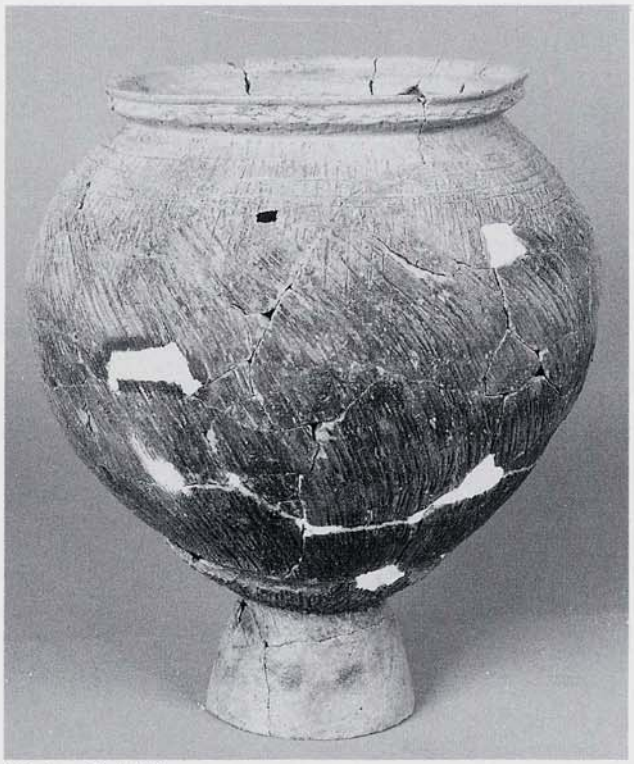
前期の遺構面を確認した。検出した遺構は、中世の溝１条と、土坑12基、弥生時代後期の方形周溝墓１基、弥生時代前期の土坑１基である。

中世の溝（SD01）、土坑（SK01～12）の埋土は何れも褐色シルト質の土で、いずれの土坑からも、山茶椀の小片を、そのうちの二つの土坑からは青磁蓮弁文椀の破片を検出している。中世に多い土坑墓と考えておいてよいのではないだろうか。

弥生時代後期の方形周溝墓（SZ02）は、一辺約10mの規模と推定され、西側に陸橋部を持つものである。周溝幅は1.2m前後、埋土は黒褐色シルト、上部は削平され主体部は検出できなかったが、周溝から弥生時代後期・欠山（廻間Ⅰ式）期の高杯２組分とＳ字甕（PL5：高さ27.8cm）が出土した（PL3）。また銅鏃を周溝埋土最下層で検出している（PL4）。この銅鏃は、柳葉形を呈し、色は青緑色、鏃（しのぎ）が明瞭なもので、身の部分の断面は菱形、茎（なかご）の部分の断面は八角形で、残存長4.7cm、幅1.9cmを図る。

中世の溝（SD01）を削平したところ、黒褐色シルト質の土を埋土とした長さ4.8m、幅2.7m、深さ10cm前後の弥生時代前期の土坑（SK13）を検出した。北東の端はSD01で削平されている。この土坑の性格は不明であるが、土坑の周囲で弥生時代前期の遠賀川式土器片を検出している。

以上のことから、弥生時代時代前期の様相は不明ながら、萩原遺跡群の中の南端のこの地域が、弥生時代後期、そして中世の時期には、墓域として機能してきたことが伺える。　（土本　典生）



PL5　Ｓ字甕

民俗探訪(2)　長良川の筌漁

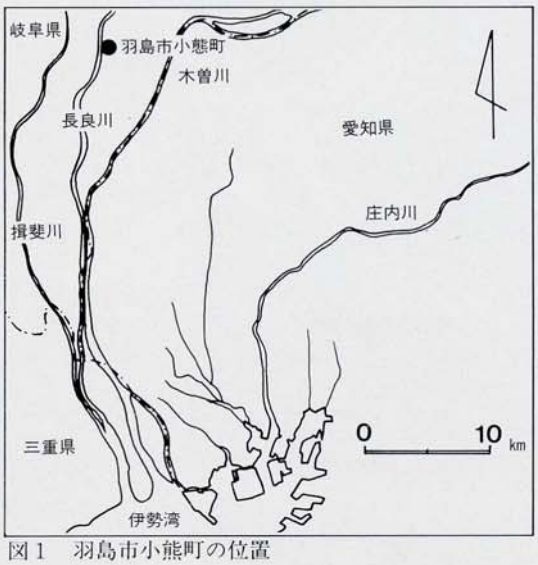


図１　羽島市小熊町の位置

１．はじめに

現在、店頭で見かける川魚の代表と言えばウナギとアユである。また、長良川河口堰問題で急に浮上した高級魚サツキマスもよく知られるようになった。しかし、実際、川魚は海の魚に比べ、食卓にのぼる回数は比較にならないほど少ないと言える。従来、平野部におけるたんぱく源の主体をなしていたのは川魚であった。輸送技術の発達によって海から運ばれる魚が増え、我々は徐々に川とのかかわりを失ってきたようである。漁師として生計を立てる人もほとんどいなくなり、アユの時期だけ漁をする、日曜日だけ漁をするといういわば兼業漁師が増えてきた。このことには、川魚に対する我々の需要の変化も大きくかかわっていると言えよう。

そんな中で、現在でも長良川(岐阜県羽島市小熊町－図１参照)で専業漁師として仕事を続けているのが大橋亮一氏(昭和10年生まれ)、修氏(昭和12年生まれ)のお二人である。今回は、６月に取材したウナギの筌漁を中心に、大橋両氏が操業する一年間の漁について紹介したい。

２．大橋氏のウナギ筌

筌は「魚類の性質を利用して陥穽せしめて捕獲する漁具で、漁撈対象に対しては一切攻撃的の手段を用いない陥穽漁具である。」と『明治前日本漁業技術史』に述べられているように、内部に餌を入れ、魚を誘い込んで捕獲する漁具である。その基本的な形は弥生時代から続いており、八尾市山賀遺跡から出土している弥生時代前期の筌（横筌、単舌）の形状は現在の筌と同じで、より細かい細工がほどこされていると言える。

大橋修氏が製作しているのはウナギ用の筌（当地方ではウゲと呼ぶ）で、ノドが２つ（二舌）ある横筌である。自分が使用する筌は、自ら製作する。現在大橋氏が使用している編台は、筌漁を主に漁を行なっていた故武山軍次氏の遺品を受け継いだものである。木錘は約100ｇで、胴部７カ所をスダレ状に結束する。編み幅は10センチ前後である。結束には本来シュロ縄を使用していたが、現在はポリエステルの縄を使っている。素材にはマダケが粘りがあって良いが、ハチク、モウソウチクでも製作するということである。76本のヒゴを編んで本体を作る。ヒゴの幅は４㎜、厚さは３㎜前後。ウナギが尻尾の力で逃げない程度にする。ノドについては、外側にあるイチノドが長さ27cm、21枚の割竹を４つに割き表竹を内側にして円錐形に結束されている。内側のニノドは、長さ35cm の割竹を使用している(写真１)。いずれの竹も先端は薄く表皮のみに削られ、ウナギが入りやすいように加工してある。次に身竹を表にして円筒状に整えた筌の原形の３カ所をタガでとめ、２つのノドをはめこんで固定する。胴部が膨らんで川底にうまくそう筌が良い筌である。以前はタニシなどが付着して筌をいためてしまうので表皮を外側にしていたが、現在ではタニシも減り、エサを入れ易くするためにヒゴが外へ反るように作っている。できあがった筌の大きさは長さ85cm、口径18.5cm で、アクを抜くために10日間ほど川で水さらしをする。

ウナギ筌漁は、毎年６月から１０月までアユ漁の合間に行なっている。ウナギが入る部分に草を詰めて、エサのミミズを入れる。夕方沈めて、次の日の朝あげる。以前は葦がはえている岸の付近に沈めたが、現在はテトラポットの脇に据える。川底が動き、筌が揺れると不漁である。近年、この時期にはアユ漁を主体としているため、漁のないときに20カ所ほどしか筌は設置してない。

写真１　ノドを編む

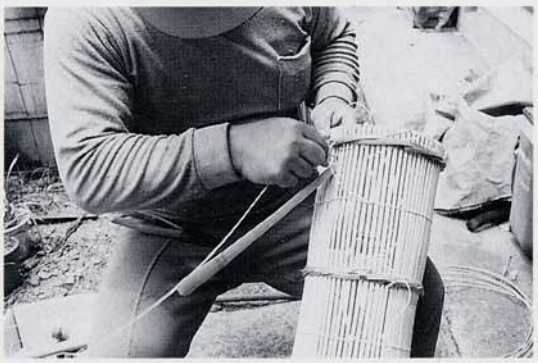


写真２　タガを固定する

写真３　筌をあげる

3．河川漁の一年

現在大橋氏が主に行なっている漁は、川マス漁(トロ流網)、アユ漁（夜川網、中猟網）である。他の漁は、特別に注文がきたときなどに行なうのみになってしまった。しかし、昭和30年ごろまでは表１に示したように、多種にわたって漁を行なっていたことがわかる。また、当時は本流ではなく支流（魚も支流に集まる）に漁の主体がおかれており、本来この地域の河川漁が支流やクリークを拠点としていたことがわかる。どの魚が不漁でも、すぐ別魚種の捕獲に転換できるように組まれていた一年のサイクルは、ここでもすでに失われてしまっている。さらに、全魚種にわたって漁を行なうことができる川の漁師の数が減少の一途をたどっているため、本来の河川漁の姿、各漁法の相互関係、季節性、漁具の製作方法などを明らかにするのが非常に困難になっている。従来の漁業形態を復元するために、今後も大橋氏の漁を追うことによって、長良川下流（コイ・フナの主な生息域－コイ域、砂泥底）の漁業の姿を明らかにしたいと考えている。

最後に仕事の邪魔をしているにもかかわらず、快くいつもお話を聞かせていただき、天然ウナギをご馳走して下さった大橋亮一、大橋修両氏に深謝の意を表する次第である。　　（田中　禎子）

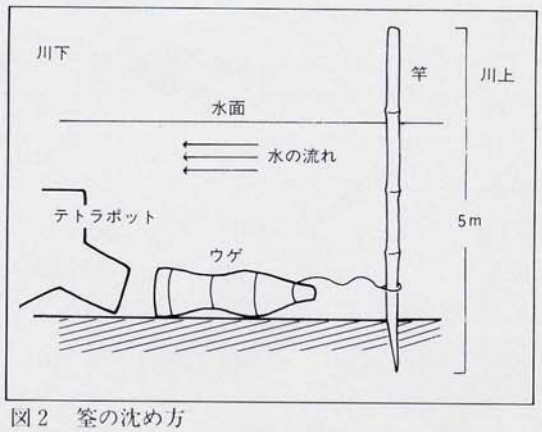


図２　筌の沈め方

写真４　筌からウナギを出す

参考文献

神野　善治　「筌漁の研究（上・下）」『沼津市歴史民俗資料館紀要』６・７号　1982・1983
野中　健一　「長良川流域における淡水魚介類の漁撈と食用」『地理学評論』第64巻第４号　1991
日本学士院編　『明治前日本漁業技術史』　1959

表１　大橋氏の漁業暦

魚名	漁法	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
全魚種	小曳網												
ウナギ	ウナギカキ												
	ハエナワ												
	地獄網												
	アナガキ												
	ウゲ												
降海型アマゴ（カワマス・サツキマス）	トロ流網												
アユ	夜川網												
	トロ流網												
	中猟網												
ウグイ	投網												
オイカワ（シラハエ）	地曳網												
ヒガイ（サクラバエ）	地曳網												
コイ・ギンブナ（フナ）	巻網												
マナマズ（ナマズ）	ハエナワ												
	ツツッポ												
スズキ	ハエナワ												
モクズガニ	地獄網												
テナガエビ	地獄網												
雑魚（コイ・フナ・ボイロ・モロコ類・ウナギ・ナマズ）	ベタ曳き（地曳網）												
雑魚（テナガエビ・モロコ類・イナセニ・ヨシ・ウキ八）	モツコ網（クリークにて）												

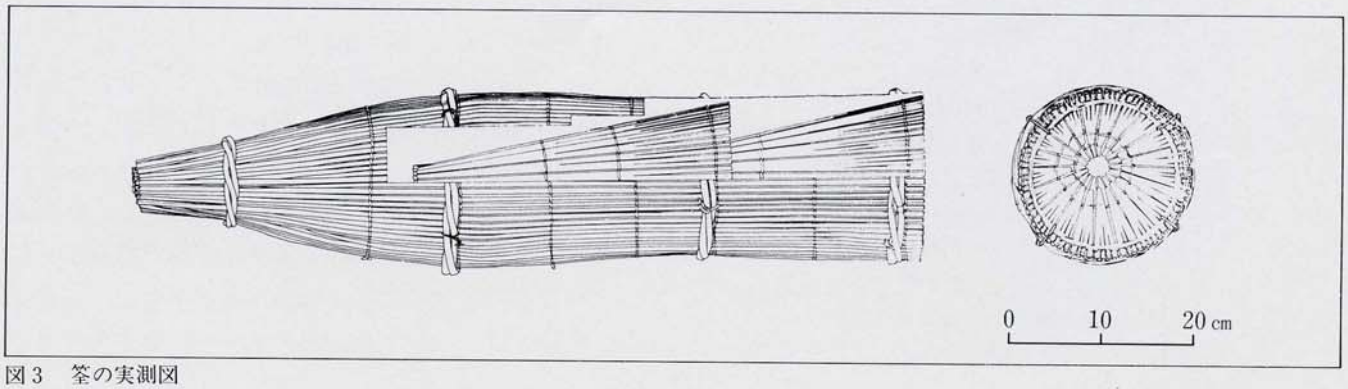


図３　筌の実測図

【萩原町中島「長隆寺三尊仏」修復なる！】

当館受託の萩原町中島「長隆寺阿弥陀三尊像」の修復が終わり、平成４年度から展示室２に常設展示されています。本尊は、木造阿弥陀如来坐像で、像高１５０cm、１３世紀初頭ころ制作の県指定文化財。脇侍は、木造観音・勢至菩薩立像で、共に像高１７８cm、１４世紀始めごろの制作とされ、市指定文化財。元年度から２年度にかけて本尊が、その後３年度に両脇侍が修復されたものです。

特に、両脇侍については、従来日光・月光両菩薩説もありましたが、解体修理の結果胎内から銘文が発見され、観音・勢至両菩薩であったことが実証された事を始め、多くの重要なことが明かとなりました。銘文は、勢至が梵字を除いて１６９字、観音が１８１字からなり、ほぼ同一の内容といえます。まず造立は、元享３年（１３２３）の鎌倉時代末期で、室町時代説もありましたが、この説は完全に否定されました。仏師は三条小納言法印常円の息子法橋良円で、鎌倉後期の円派の作品研究の上で貴重な資料となるものです。寄進者は、沙弥承念、すなわちこの地方の豪族中島氏の総領長持であること、長持が鎌倉幕府の安泰・天下太平の祈念・長隆寺開基以来の人々、両親や亡息の菩提、一族の繁栄を祈願しての造立であったこと等により、長隆寺は中島氏の菩提寺であったこと等が判りました。

最後に、この両脇侍は造立当時の手足等がそのまま残っており、この意味でも元享３年段階の基準資料として貴重なものと言えます。

（小野田雅一）

観音菩薩銘文

春季特別展「棟方志功と佐藤一英」展 大好評の中に終わる!!

博物館では４月２５日㈯から５月２４日㈰までの２５日間、平成４年度春季特別展「棟方志功と佐藤一英」を開催し、昭和６２年１１月開館以来最高の8,911人の入館者を得て、圧倒的好評を博しました。また会期中５月７日から２２日にかけて１４日間（入館者4,548人）アンケートを実施しましたので、この分析をするとともに、特別展成功の秘密を探ってみたいと思います。

アンケート期間は会期の５６．０％、入館者数では５１．０％を占め、標本数５６８名は総入館者数の６．４％と、精度は高いものと思われます。

まず、男女別にみていくと女性が６２．０％を占め、年齢別では４０歳台が３０．３％、ついで５０歳台２２．９％、６０歳以上２１．５％と４０歳以上の方々で７４．７％と、「一般」の女性が来館者の主流でした。住所地は市内の方６１．７％、県内３１．１％と愛知県内で９２．８％となり、来館方法は自家用車７０．２％、自転車１２．３％、電車１０．９％と続きます。一宮市内を中核として、自家用車でみえる方が一般的でした。

観覧の動機としては、「その他」３５．０％、一宮広報３１．０％、商業新聞２０．０％、ポスターが８．２％となっています。「その他」では「知人からの紹介」が極めて多く、観覧者増大の起動力が市内の知人同士のいわゆる「口コミ」にあったこと、さらにご遺族を始めとする地元萩原町の人々の絶大な協力によることが窺われます。また広報媒体としては、ポスターよりも一宮広報・商業新聞が有力で、新聞社との連携も重要なことが再確認されます。ちなみにテレビ・ラジオ放送によるものは、両者併せて４．５％でした。

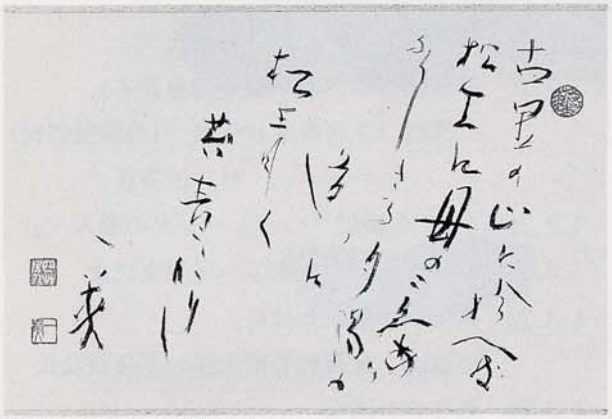
来館回数としては、初めての人が４６．３％と今回の企画に触発されて来られた方が半数近くを占めています。ついで６回以上が１８．３％、３回目・４回目が各々１３．７％、１１．３％となり、博物館が地域に定着している様もみてとれます。

佐藤一英は、東京時代の昭和８年から１０年にかけて、長篇詩「大和し美し」、新韻律詩「鬼門」、聯組詩「空海頌」の大作を次々と発表しました。同郷の詩人福士幸次郎を介して一英と出会った棟方志功（おそくとも一英が児童文学のルネッサンスを目指して６年から翌年にかけて『児童文学』２冊を編集した時、志功は挿画で協力しており、このときまでには両者は邂逅したものとみられる）は、これらの大作をもとに１１年から１２

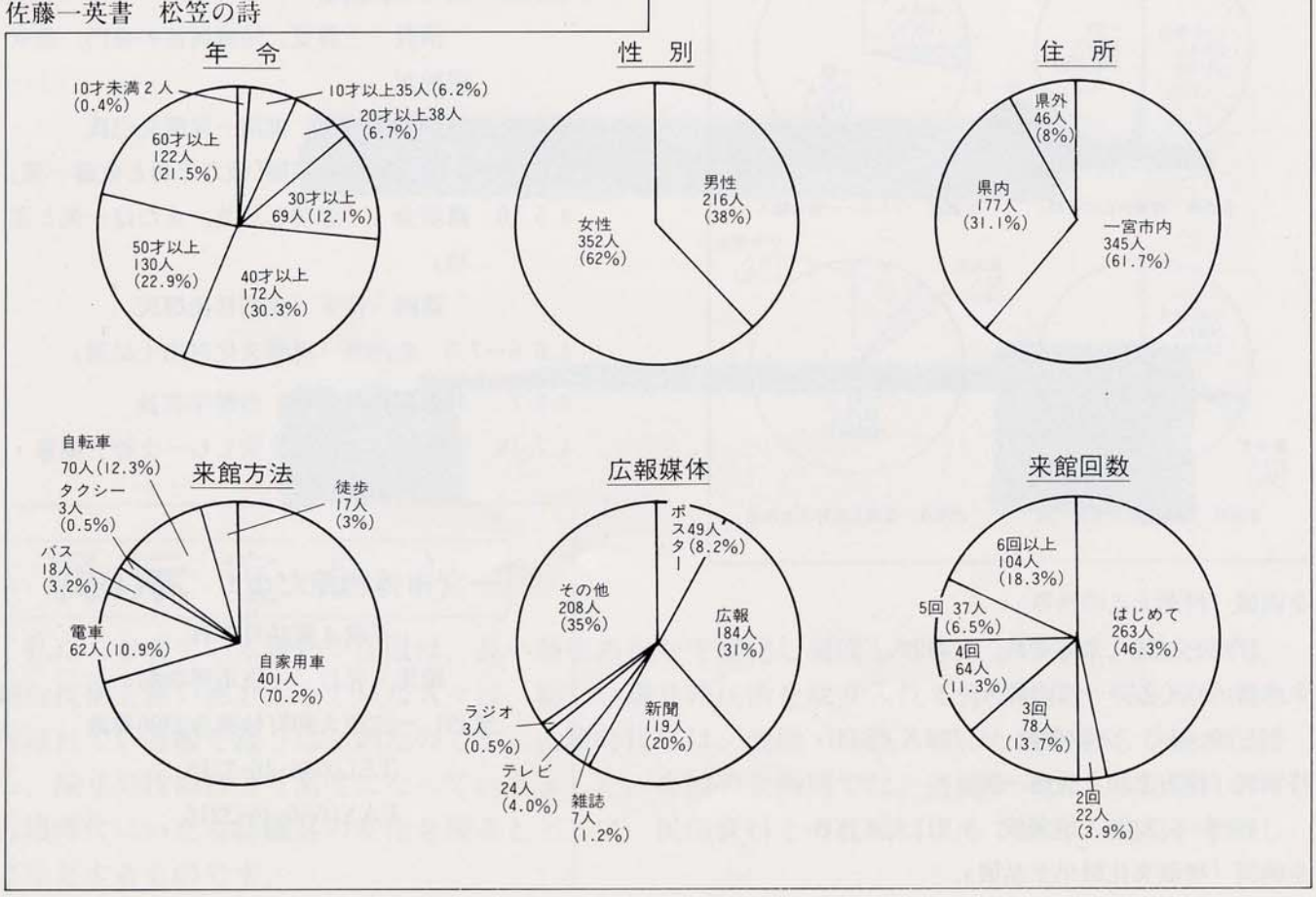
年にかけて、「大和し美し版画巻」・「空海頌版画柵」・「東北経鬼門譜」の３作品を制作、民芸運動の柳宗悦等の人々に認められ、世界的大版画家として大成するきっかけを作りました。また、近年発掘された資料によると、昭和１０年の一英の和訳「観音偈」により、志功は昭和１３年「観音経曼荼羅」を制作したと述べられています。昭和１０年代の志功は「傑作の森」の時代といわれていますが、その基礎には一英の諸作品があったことが理解されます。第２次世界大戦後、一英は故郷一宮に定着し、半ば埋もれた存在となりますが、志功は昭和３０・３１年とサンパウロ・ヴェニスの両ビエンナーレでグランプリを獲得、４５年には文化勲章を受章するなど華々しい活躍をします。

今回の特別展は志功のグランプリ受賞作「釈迦十大弟子」・上記の３作品を始めとした倭画・油絵にわたる代表作、一英の詩・書・画の代表作を一堂に展示し、両者の交流を懐古したものです。展示室における一英作品の「自由濶達で軽やかな運筆」、書の「雄渾」さ・「丈け高さ」は、志功作品の素晴らしさとともに、その輝きを増し、大版画家志功の作品と対峙して、詩人の生命力が存分に発揮されていました。

世界的大版画家志功の代表作が地元で観覧できるとともに、一英の作品がそれによって見直されたということが、今回の成功につながったものと思われます。　　（小野田雅一）



佐藤一英書　松笠の詩

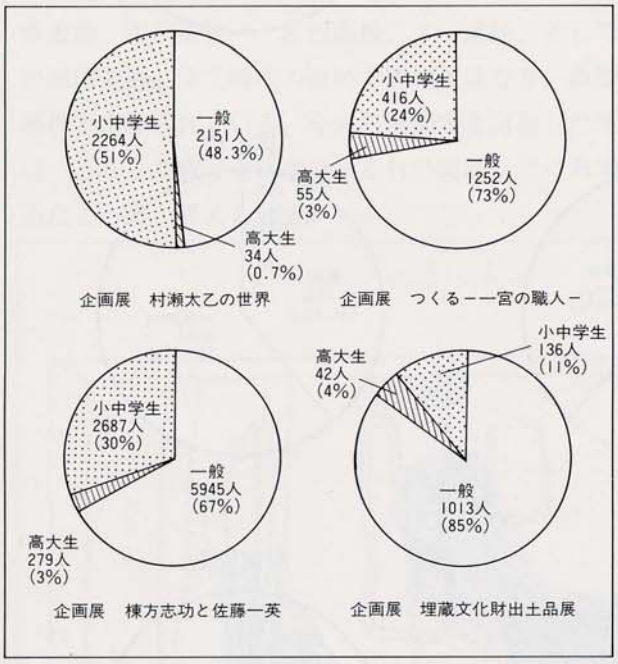


【ご来館有難うございました（4.1.1～7.31）】

平和町婦人会・水野宗幾社中・伝法寺婦人会・中部中３年生・愛知県婦人文化会館歴史グループ・建築士会・大赤見農協婦人会・東浅井婦人会・宮西小５年生・神山小６年生・大和西小６年生・岩村町郷土史を学ぶ会・富士小・東京デザイナー学院名古屋校・萩原中１、２、３年生・中島小５、６年生・萩原小５、６年生・一宮市軍恩会・薬草の会・大和中・尾西市歴史民俗資料館・県立興道高校・稲翠会・南部中特殊学級・トライデントスクールオブデザインスペースコース・多治見市旭ケ丘公民館・一宮邦謡会・横地子供会・半田市老人クラブ・親子施設めぐり・一宮市内小学校３年生全員

※平成４年１月から２月にかけて、市内の小学校３年生の皆さんが歴史を学ぶきっかけとして博物館見学をしました。博物館では、学習室に台所道具のコーナーを設けてそのお手伝いをしました。

【展覧会開催中の入館者数】



企画展「村瀬太乙の世界」

1/15～2/16　入館者数　4,449人／27日

企画展「つくる－一宮の職人－」

2/29～4/5　入館者数　1,726人／31日

特別展「棟方志功と佐藤一英」

4/25～5/24　入館者数　8,911人／25日

企画展「埋蔵文化財出土品展」

6/6～7/5　入館者数　1,191人／26日

【博物館日誌（抄）（4.1.1～7.31）】

4.1.15～2.16　企画展「村瀬太乙の世界」

4.1.19　記念講演会「市の隠者－村瀬太乙」
講師　太乙研究家　橋本秀男氏

4.1.26　博物館講座「染めと織りの世界を語る」
第１回「日本の手織機の流れを語る」
講師　国立民族学博物館助教授
吉本　忍氏

4.2.2　第２回「日本の伝統染織を語る」
講師　㈱染織と生活社取締役編集長
富山　弘基氏

4.2.9　第３回「正倉院を始めとする古代裂を語る」
講師　川島織物史料室織物文化館主席研究員
高野　昌司氏

4.2.16　第３回「草木染手織り紬を語る」
講師　工房雑華林代表　（飛騨民俗村）
林　泣童氏

4.2.29～4.5　企画展「つくる－一宮の職人－」

4.3.1　竹細工実演会　実演－尾関克己氏

4.3.22　講演会「職人と技術」
講師　武蔵野美術大学　工藤員功氏

4.3.29　島文楽公演会
演目　三番叟、傾城阿波の鳴門、壺坂霊験記

4.4.5　竹細工実演会　実演－尾関克己氏

4.4.25～5.24　春季特別展「棟方志功と佐藤一英」

4.5.10　講演会　「志功と一英、または一英と志功」
講師　作家　長部日出雄氏

4.6.6～7.5　企画展「埋蔵文化財出土品展」

4.6.7　発掘調査報告会　当館学芸員

4.7.18　企画展「土の音を楽しむ－土鈴」開幕

一宮市博物館だより　第14号
平成４年10月１日
編集・発行　一宮市博物館
〒491 一宮市大和町妙興寺2390番地
TEL0586-46-3215
FAX0586-46-3216